

ユートピアン共同体の歴史

西洋社会に古代から近代まで
に現われた数多くのユートピ
アン共同体のあとをたどる

山根 常男

(シェイカーの踊り)



序

キブツを研究するようになってから、私はキブツと同じような社会がユートピアン共同体と呼ばれて、過去にも数多く存在していたことを知った。私は将来いつかはこうした共同体が、いつ、どこに存在したかを明らかにし、できればそうした共同体の歴史を書いてみたいと思つた。それ以来、私はいろいろな書物を集めてフアイルを作り、ユートピアン共同体に関するデータを整理した。フアイルはきわめて不完全なものであったが、ちょうど良い機会にめぐまれたので、一応、歴史をまとめることにした。このようにしてできたのがこの文である。

さてこの本文に出てくる地球上の処々方々に建設された多くのユートピアン共同体は、たとえていえば、歴史という大きな流れの中に点々と散在する離れ小島のような存在で、そこには系譜的なつながりというものがない。したがってユートピアン共同体の「歴史」という表現は適当でないかもしれない。おそらくより正しくは、「歴史上に現われた」ユートピアン共同体とでもすべきであるだろう。このことだけは予め断っておく必要がある。

一 古代・中世・近世—ヨーロッパ

古代のユートピアン共同体については、たとえばタキツスやシーザの書いたものの中に、共産的な生活をしてきたゲルマン部族についての叙述が散見される。しかしこれらはいまいで科学的信頼性をもつものではない。西暦前に存在したユートピアン共同体として、比較的資料が整っているのは、エッセネ (the Essenes) である。

エッセネは紀元前二世紀ごろにパレスチナにあったユダヤ教の一教派である。パリサイやサドカイが政治的宗教団体であったのに対し、エッセネは政治に全く関心をもたなかった。彼らはかつては四千人を数え、主として死海沿岸のエン・ゲディの付近に住んでいた。彼らは自制・忍耐・儉約・質素・平等を重んじ、厳格な律法と戒律を守って敬虔な信仰に徹し、政治と結託して墮落した教会の罪惡を否定し、農業に従事すると共に、平和にのみ役立つ手工業に従事し、私有財産を否定して、居住・食事・衣服・財産を共同にし、殆ど完全な共産的生活を実現していたといわれる。エッセネはまた快樂を罪惡とし禁欲を重んじたので、結婚を否定する独身者の集団であった。このためにメンバーの補充は外部からの参加に依存したが、メンバー加入のさいは、すべての個人財産を寄付し、ひじょうに厳格な試験期間を経なければならなかったといわれている。

西暦紀元後は、新約聖書の使徒行伝の中に、「信者たちはみな一緒にいて、一切の物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に

応じてみなの方に分かち与えた」(第二章四四・四五)とか、「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、誰一人その持ち物を自分のものだと思ふ者がなく、一切の物を共有していた」(第四章三二)とあるように、初期の時代のキリスト教信者たちは消費の面で共産的生活をする傾向があったようである。しかしこの傾向は、しばらくすると教会から消え失せ、それは主として教会に造反するマイノリティ・グループによって引き継がれていった。これらのグループは質素な生活を善とし、一切の持ち物を分かち与えるという、原始キリスト教的理想を実現しようとした。

六世紀には、こうした傾向はカソリックの世界においても、ベネディクト会などの僧院生活の中に復活された。そこでは集団主義的な経済統制と共産的な生活慣行が行なわれ、僧院のメンバーは全体の仕事のために働き、共同の住居に住んで、食事その他一切の生活を共にした。

ヨーロッパではルネッサンス以後になると、当時の教会に造反して、異端という烙印を押されたセクトの中に、孤立した共産的生活をするものが現われた。これらのセクトの主なものあげると、十三世紀にフラングイス(現在のベルギー)のルーベンに発生した禁欲的な平信者のグループで、のちにオランダを通じてフランス、ドイツ、イタリーにも広がったベガース(Beggars、この女のグループはBeginesといわれた)、一四世紀にオランダに発生し、一四・一五世紀にはイギリスに広がって、教会改革運動の先鋒となったローラード(Lollards)、一五世紀にボヘミアにおいてヤン・フス(Jan Hus)の信者が宗教改革のためにつくった急進的なグループのタボリット(Taborites)、一五・一六世紀にドイツでトマス・

ミュンツァー(Thomas Münzer)の指導の下に、千年王国を地上にうち立てるための農民を組織したアナバプティスト(再洗礼派)などがある。

この時代にヨーロッパ以外の場所に存在した注目すべきユートピアの実験は、パラグワイのジェスイットである。彼らは一六世紀の末頃、スペインの地主に迫害されてジャングルに逃亡していたグアラニ族の土地に入って布教に従事したが、やがてスペインの支配下にこの土地に定住する認可を得て、彼らを統治するたためしにに共産的な制度を發展させていった。かくして一六一〇年以来、全体として三一の部落ができ、それらは百人から百五十人のジェスイットの僧侶によって指導された。最高の地位には大僧正がおり、その下には長老たちがいて、長老の下で僧侶たちが土人に対する種々な教化事業にたずさわった。土人たちの間では完全ではないが、相互扶助的な共産制度が行なわれていた。これは、結局、グアラニ族自身のユートピアン共同体というよりは、むしろジェスイットの僧侶たちによって管理された、いわばユートピア的共和国ともいえるべきものであった。この「共和国」は一七六八年に、ジェスイットが追放されるまで、約一世紀半にわたって存続したのである。

さて以上のごとく、古代から中世、さらに近世にいたる間、存在したとして知られているユートピアン共同体は、すべて宗教的なものであった。しかもそれらの殆どは、当時の支配的宗教の権威つまり教会からは異端と見なされたセクトによって建設されたものであった。彼らの共産主義の源泉は、結局、「一切の物を共有にし、みなに分ち与える」という原始キリスト教的な教訓にあったといつて差支えないであろう。したがって彼らの共産主義は生産の面より

は、むしろ消費生活の領域で行なわれ、決して完全なものとはいえなかった。彼らの共同体建設の真の目標は宗教的信念を貫くことにあり、共産的生活それ自体が目的ではなかったようである。そしてまたその共産主義は、宗教的生活を実現していくために、自然発生的に生まれてきた場合も多かった。それは彼らが異教的なセクトであったことと大いに関係している。なぜなら彼らは異教的であったために孤立し、そのために迫害をうけ、それに伴ってしばしば新しい土地へ移住しなければならなかったが、こうした事態は彼らをしてしばしば、相互扶助的な共産的生活をすることを余儀なくさせたからである。

二 近代——北米大陸

以上、われわれは古代から中世、近世にわたって、宗教的なユートピアン共同体が、主としてヨーロッパ大陸の処々方々に現われてきたことをみてきた。ところが一九世紀になると、ユートピアン共同体は殆ど爆発的といつてもよいくらいに、北米大陸の各地に発生してきた。なぜユートピアン共同体の舞台が、このように旧大陸から新大陸に移ったのであろうか？

ここでわれわれがまず注意しなければならないことは、北米大陸に数多くのユートピアン共同体が生まれてきたといつても、それらの共同体を建設するのにイニシアティブをとったのは、北米大陸の人ではなく、その殆どがヨーロッパからの移住者であったということである。つまり北米大陸に生まれたユートピアン共同体の多くは、

その起源をヨーロッパにもっているのである。これはユートピアン共同体の建設者たちがヨーロッパではその目的を達しえないため、それを新大陸で実現しようとしたことを意味している。それならばなぜ新大陸はその目的の達成に好都合だったのであろうか？これは新大陸が、ユートピアン共同体の建設に適した物理的ならびに精神的な条件をそなえていたからである。それは具体的にいえば、新大陸には新しい共同体を建設するに十分な土地があったこと、および新しい共同体の建設を許容するに足るだけの自由にして寛大な精神風土があったことの二つである。

さて、この時代のいま一つの顕著な特徴は、それまでのように単に宗教的なユートピアン共同体だけでなく、非宗教的・世俗的なユートピアン共同体がはじめて生まれ、共産主義そのものを目標として、その実現を自覚的に企図するものが生まれてきたということである。したがって近代におけるユートピアン共同体の叙述は、宗教的なものと世俗的なものの二つに分けて考察する必要がある。

1 宗教的ユートピアン共同体

アメリカにおける宗教的ユートピアン共同体は、すでに一七世紀にいくつか現われているが、一九世紀以前に現われたもので、とくに有名なのは、アミッシュ・メノナイト(Amish Menonite)、ソリタリー教会(Society of the Solitary) およびハイカー(Shakers)の共同体である。

アミッシュ・メノナイトは破門された者を徹底的に排除するといふきわめて厳格な紀律をもって、一六九三年にメノナイトから分れ

たスイスのアナバプティストの子孫で、その名は彼らのリーダーのヤコブ・アムマン(Jakob Ammann)からとったものである。アムマンはその厳格さを守るために男は髭をそることを禁じ、女はボンネットやショールを身につけることを指示したが、これは現在でも守られている。彼らはまたアメリカへ来てからも Pennsylvania Dutch といわれるドイツ方言を使っている。アミッシュはヨーロッパでの迫害のため、スイス、フランス、ドイツ、オランダ、さらにはロシアまで各地を転々としたが、早くも一七二七年にスイスからペンシルバニアに移住し、それ以来一七八〇年までの間と、一八一五年から一八四〇年の間に多くのメンバーがアメリカに移住した。アミッシュはヨーロッパでは土地不足と迫害のため、強固な共同体をつくることはできなかったが、その間に相互扶助の紀律、収約農業、倹約と額に汗する生活を学んだ。しかしアメリカへ来ると、彼らは無限の土地を得、同志が一緒に集まって固く約束した自給自足の共同体をつくることができるようになった。現在アミッシュは二万人前後のメンバーを数え、ペンシルバニアのランカスター郡、オハイオのホームズ郡、インディアナのエルクハート郡に最も多く住んでいる。アミッシュの共同体は共産主義的ではなくむしろ家族主義的で、強い父権の権威の下に強固なゲマインシャフトをなし、メンバーは農業を本業とするが、大工、石工、鍛冶などの職人的仕事にも従事し、自給自足の実現を目指す小共同体を形成している。アミッシュの外界に対するノンコンフォームリスト(注：国教などを奉じない人)的態度は、彼らの厳格な宗教的信念からくるもので、それは戦争、政治への不参加、外部との共同事業の禁止、特異な服装、身づくろい、言語などに現われている。

ソリタリー教会は、ドイツから移住した七日洗礼派 (Seventh Day Baptist) の教祖、ヨハン・コンラッド・バイツセル (Johann Conrad Beissel) によって組織されたもので、バイツセルとその信奉者たちは一七三二年に、ペンシルバニアのエフラタ (Ephrata) に定住した。この共同体では独身主義と財産共有が奨励された。しかし結婚や共同体外の財産所有を禁じたわけではなかった。最盛時には、三百人以上のメンバーをもっていた。バイツセルが一七六八年に死ぬと、ピーター・ミラー (Peter Miller) がその後を継いだ。しかしミラーが一七九八年に死ぬと、この教会は急速に衰えはじめた。

シェイカーは、「キリストの第二降臨を信する者の連合教会 (United Society of True Believers in Christ's Second Appearing)」と「ウツ」が正式の名で、イギリスのアン・リー (Ann Lee) によって創始された、一千年太平説的な信仰をもつ、いわば「踊る宗教」である。一七七四年にアン・リーとその信者たちはアメリカに来て、一七七六年にニューヨーク州のウォーターグリエットに最初のコロニーを建設した。その後あいついでいくつかのコロニーが建設され、アン・リーは一七八四年に死んだが、その翌年にはニューヨーク州のマウント・レバノンに総本山が建設された。シェイカーの共産的な共同体を組織化したのは、アン・リーの後継者の一人ジョセフ・ミーチャム (Joseph Meacham) で、彼は企業と厳格な信仰生活とを結びつけた。男は農業と手工業、女は主として家庭的な仕事、それに裁縫工業に従事した。彼らは独身主義で、結婚を行わず、男女は別々の部屋に住み、夫婦が加入した場合には、互いにきょうだいと見なされた。彼らは一つの建物の中にすべての

物を共有して住み、それは「家族」と呼ばれた。シェイカーの全盛時代は一八三五年から六〇年にかけてであって、かつて信者は五千人に達し、コロニーも二〇以上を数えたが、その後、急速に減少した。シェイカーは数多い宗教的ユートピアン共同体の中でも、最も長く続いたものの一つである。

さて一九世紀に入ると、数多くの宗派の共同体が発生した。その主なものを宗派別にみるとしよう。まず分離派 (Separatist) に属するものとして、ハーモニスト (Harmonist)、ゾアライト (Zoarite)、アマナイト (Amanite)、ジャンソナイト (Jansontie) があげられる。

ハーモニストは、ドイツ人ジョージ・ラップ (George Rapp) によってつくられた団体で、ラピスト (Rappist) とも呼ばれる。彼の宗教的信念は社会主義的であったために、彼とその信者たちはドイツ政府に迫害され、そのため一八三〇年にアメリカに移住した。翌年ペンシルバニアのバトラールに私有財産を放棄した共同体を建設した。最初、彼らはひどいような困苦欠乏と戦わねばならなかったが、しだいに繁栄していった。しかし一八一〇年にその土地と建物等売りはらってインディアナに移り、その新しいコロニーをハーモニと名づけた。彼らもシェイカーと同じく独身主義であった。最盛時には千人を超えるメンバーを有したが、一八四六年にラップが死ぬと、しだいにメンバーが減少し、雇用労働者を使うようになって自然に解体した。

ゾアライトは、ヨセフ・バウムラー (Joseph Baumbler) をリーダーとするドイツのプロテスタントの農民を母体としてつくられた

ものである。一八一七年に二二五人の信者がバウムラーに連れられてアメリカに移住し、いくたの苦難を経たのち、オハイオのタスカラワに定住して、その地をゾアールと名づけた。ゾアールに定着すると彼らは共産的な生活を行ない、最盛時の一八三〇年代には五百人のメンバーを数えるに至ったが、しだいに繁栄してくると、最初の共産的な生活は資本主義的なものになり、ついには財産を分配して、一八九八年に解体した。

アマナイトは、正式には「真の靈感派の教会 (Society of True Inspirationist)」とて、一八世紀の初期にドイツに起ったインスピレーションに起源をもつものである。インスピレーションは当時のドイツ教会の形式性に対して激しく反抗したために、長い迫害の歴史を経験し、一八四三年に彼らはついにクリスチャン・メッツ (Christian Metz) にひきいられてアメリカに移住した。彼らははじめニューヨーク州のエベンザー (Ebenezar) に五千エーカーの土地を買って、コロニーをつくった。しかしメンバーが増え、付近の都市バツファローが発展するにつれて、彼らの静かな宗教生活には適しなくなり、一八五四年にアイオワに移り、その土地を聖書に出てくる名に因んでアマナと名づけて開発した。メンバーはすべてドイツ人で農業と手工業に従事し、各家族ごとに自分の家に住んで、私有財産も認められている。食事だけは村にいくつかの食堂があつて共同炊事が行なわれる。アマナイトはのちのハテライトと共に古い歴史をもち、現在もおお存続しているもので、彼らはアイオワに七つの村を建設し、人口は現在、約一四〇〇人ある。

ジャンソナイトはスウェーデンのセパラチストのグループで、エリック・ジャンソン (Erick Janson) をリーダーとして、一八四六

年にアメリカに移住し、二年後にイリノイのビショップ・ヒル (Bishop Hill) にコロニーを建設した。彼らははじめ半共産的な生活をし、かなり繁栄もしたが、一八五〇年にジャンソンが殺害されたのち、内紛が生じて、一八六二年に共有財産を分割して解体した。

つぎに一六世紀におけるプロテスタント宗教改革の最左翼であつたアナバプティストに源をもつメノナイト (Menonite) に属するものとして、ハテライト (Hutterites) と、すでに述べたアミツシュ・メノナイト (Amish Menonite) の二つの教派のつくった共同体がある。

ハテライトは、ハテリアン教団 (Hutterian Brethren) といわれ、メノナイトという用語は用いないが、やはり一六世紀のアナバプティストに起源をもつものである。この教団の名称は、ヤコブ・ハッター (Jakob Hutter) の名からとつたもので、一五三三年に創始された。この教団の三百年以上にわたる経験は、実に圧迫、迫害、孤立、逃亡の歴史であつた。政府に対する無抵抗主義による反抗と、孤立したコミュニティの生活によって、彼らはドイツからオーストリア、さらにロシアへと点々と移住し、一八七四年、彼らはいつにアメリカに移つて、南ダコタのボンノム郡に定住することになった。現在、ハテライトのコロニーは南ダコタに一〇、モンタナに八、カナダにはマントバとアルバータに約三〇存在しているが、ボンノムのコロニーは母コロニーとされている。ハテライトのコロニーはこの他にも、バラクワイとイギリスに存在している。彼らは徹底的な共産主義的生活をいとなみ、財産の共有を強調して、個人的な収入というものはなく、衣服さえも私有を認められていないといわれて

いる。生産と消費における彼らの徹底したキリスト教的共産主義は、経済的にも成功しており、現在アメリカ、カナダあわせて五千人のメンバーがいるとされている。ハテライトはいままでに数多く北米大陸に存在したユートピアン共同体のうち、最も生命が長く、最も共産主義的なものである。

この他、アメリカに建設されたユートピアン共同体として主なものをあげると、パーフェクションスト (Perfectionist) の共同体、ベースル (Bethel) とオーロラ (Aurora) に建設された共同体、ホープデイル (Hopedale) に建設された共同体およびドウコポールズ (Doughbors) の共同体の四つをあげることができよう。

パーフェクションストは、アメリカにおけるユートピアン共同体の中でも、その特異な性的制度によって、最も有名なものである。パーフェクションストの運動はジョン・ハンフリー・ノイエス (John Humphrey Noyes) によって、パーモントのプトネイ (Putney) において始まった。一八三九年に彼はここにコロニーを建設し、ここで、原罪からの完全な解放は、神との私的な交通によってのみ得られると強調し、私有財産および男女関係を含む一切の私的関係の共産主義を実施した。彼の有名な「複合結婚 (Complex Marriage)」は既存の一夫一妻婚を否定して、管理された性的自由を強調するものであった。しかしこの複合結婚は一夫一妻的な外部社会の激しい非難を招き、このグループはプトネイを追われ一八四八年にニューヨーク州に移住して、オネイダ (Oneida) に新しいコロニーを建設した。しかし複合結婚に対する外部社会の批判はここでもやはり強く、一八七九年にノイエスはついに、この性的制度の廃止

を宣言した。その後、このグループでも普通の結婚が行なわれるようになり、やがて財産の共有も廃されて、一八八一年には一つの株式会社になった。

ベースルとオーロラに建設された二つの共同体は、ともにドイツ生まれのウィリアム・カイル (William Keil) によって建設されたものである。カイルは一八三八年にアメリカに來住し、多くの追隨者を集めて、一八四四年にミズリーのベースルにコロニーを建設した。彼はすべての物を共有にし、一人の長老の下に絶対的に服従して団結すべきことを強調した。ベースルのメンバーは一時は千人に達したといわれる。その後一八五六年にはもう一つのコロニーをオレゴン^{ユタ}のオーロラに建設した。しかし一八七七年にカイルが死ぬと、内紛が生じ、財産の共有は廃されて、ベースルは一八八〇年に、オーロラは一八八一年に解体した。

ホープデイルに建設された共同体は、普通救済派の僧侶アディン・バルウ (Adin Ballou) によってつくられたものである。彼は一八四一年にマサチューセッツのホープデイルに社会主義的なコミュニティを建設した。これは宗教的な共同体というよりは、むしろ一つの株式会社であった。バルウは賃金を支払い、生産を共同で行ない、そのメンバーに外で財産をもつことを許す株式会社によって、個人主義と社会主義とを結びつけることができると信じた。この共同体は一時は百人以上のメンバーを数えたが、一八五六年にその後継者のドレイバー (E.D. Draper) によって解体され、普通の会社に再組織された。

ドウコポールズは、ロシアのノンコンフォーミストのセクトで、現在は主としてカナダに住んでいる。ドウコポールズはロシア語で

「聖霊の土」の意味で、一八世紀の中頃に一つの運動として組織化された。このセクトは西欧で言えばメノナイトやクエーカーに匹敵するもので、教会、政府に反抗し、兵役と戦争に反対した。このために政府のきびしい迫害をうけ、一九世紀の初期にはアゾフ海岸にやまと定着した。しかし一八四一年には政府によってトルコに近いコーカシアに追放され、そこに定住して繁栄したが、一九世紀の終りには兵役の強制で新しい危機が訪れ、ついに一八九八年に八千人の信者が新大陸に渡った。当時のリーダーはピョートル・フェリール (Pyotr Verigin) で、一九〇二年に信者に合流し、サスカチワンに定住した。彼らはその後西部にも広がり、いくつもの村に住んで共産的な生活を営んだ。

2 世俗的ユートピアン共同体

以上は宗教的に動機づけられたユートピアン共同体であるが、一九世紀のアメリカでは宗教的動機づけとは関り合いないユートピアン共同体が数多く建設された。これらのユートピアン共同体はしばしば社会改良的 (Socioreformist) と呼ばれる。これらのユートピアの実験は、宗教的な実験の多くが、多かれ少なかれ逃避的なものであったのに対し、少なくともアイディアとしては、より積極的な企図をもつものであった。しかしこれらの非宗教的——世俗的——社会改良的なユートピアの実験はアメリカ人のアメリカでの実験ではなく、ヨーロッパの社会改良家たちのアイディアがアメリカで実験されたものであった。これらの社会改良家はイギリスのロバート・オーウェン (Robert Owen)、フランスのシャルル・フーリエ (E.

M. Charles Fourier) およびエティエンヌ・カペー (Etienne Cabet) の三人である。以下これらのユートピアの実験について簡単に述べよう。

〈A〉オーウェナイト (Owenite)

ロバート・オーウェンの社会組織のアイディアを簡単に述べるとつぎのようである。彼は社会組織の単位として五〇〇人ないし一〇〇〇人の共同体を構想する。この共同体では農業と工業を併せ行ない、私有財産は存在しない。すなわち生産手段はすべて集団所有で、消費財も使用中の私的管理が認められるにすぎない。メンバーはすべて各人の性向にかなった仕事を選択し、労働はすべて共同で従事する。不快な労働や過激な労働にはなるべく機械を使用するようにする。全メンバーは年齢階級に区分され、子どもは一二歳の頃から労働教育を施して修業させる。経済的労働は主として二〇歳から二五歳の青年男女によって行なわれ、二五歳から三〇歳の者は労働時間を短縮される。三〇歳以上になると労働の義務はない。共同体の管理は、対内的なことは三〇歳から四〇歳のメンバーでなされ、対外的なことは四〇歳から五〇歳のメンバーでなされる。メンバーはすべて共同体のキャンパスの中央に建てられた大きな建物の中に、各家族ごとに住む。子どもは幼いときから集団的に養育され、規律正しいかつ合理的な教育が行なわれる。

ざっと以上のごとくである。オーウェンは社会がこうした共同体に再組織されることによって、都市と農村の区別はなくなり、これらの共同体が互いに独立し、かつ協力関係を維持することによって、将来は国家も消滅するだろうと考えた。

オーウェンは二九歳の若さで共同経営者と共に、義理の父からスコットランドのニュー・ラナーク(New Lanark)の紡績工場を譲りうけ、約二千人の労働者を使う経営者となったが、労働者の悲惨な生活条件に驚いて、より良い住宅、子どものための学校、正当な価格で物が買える会社経営のストアなど、当時としては破格的な労働条件の改善を行なった。ニュー・ラナークにおける成功で彼の社会主義者としての名声は大いに上った。そこで彼はイギリスで自分の理想と考えている共産的な共同体を建設しようとした。しかし彼はその建設に必要な資金を得ることができなかった。やがて彼は自分の夢を、独立宣言の精神に満ちあふれたアメリカで実現しようとした。

一八二五年、彼は当時エコノミーへ移住したラピストから、インディアナの前住地ハーモニーの土地を買いとり、そこに共同体を建設することにした。それはニュー・ハーモニーと名づけられた。オーウェンの名はアメリカではすでに有名で、ワシントンでの彼の数々の講演には多数の聴衆が集まって評判よく、ニュー・ハーモニーへの参加を希望するものは多数に上り、数週間九〇〇名を超えるほどであった。結局、応募した者は何らの選択もなされずに受け入れられた。このようにして衣食住を必要に応じて与え、すべての労働を平等に評価する共産生活を始めたが、二年間にしだいに経済状態が苦しくなり、一八二八年、オーウェンはついにニュー・ハーモニーの実験の中止を宣言した。

オーウェン主義の共同体は一八二〇年から一八二八年の間に、主としてインディアナ、ニューヨーク、オハイオの各州に、少なくとも九つ、より小さい規模で生まれた。しかしすべて短命であった。

の創意を尊重する個人主義と共産主義の調和によってのみ、人間の幸福が得られると考えた。このためファランクスでは、私有財産制度は決して廃止されてはいない。したがって消費財に関しては各人の私的所有が認められている。しかし賃金制度は生産への情熱を損うものとして廃止され、その代りにメンバーは、それぞれ共同の生産活動に従事した量の多寡によって、共同利益の分配にあずかる権利をもつとされる。フリーエはこの共同利益の分配を、全体の二分の五は労働、二分の四は資本、二分の三は技能の報酬に割当てられるべきだとした。ファランクスはオーウェンの共同体と同じく農業と工業の結合を志向し、生産においては、大企業の長所と小企業の長所とを併せもち、消費においては、大量物質の一括購入による経済的利益をもつとされる。

ファランクスの管理についていえば、そこには自由に選ばれた数人のメンバーがおり、ファランクスの長、即ち「アナーク」(Anarch)「も自由に選出される。しかしファランクスでは、メンバーはすべて自分の欲求を十分に充足しているゆえに、権力や政治が必要となる余地はないとされている。ファランクスの中央にはメンバーの家族が住む大きな建物があり、それはファランステール(halanstere)と呼ばれる。それはファランクスのメンバーの生活・文化の中心である。オーウェンが国家は消滅するといったように、フリーエもこのファランクスを建築用の石材にたとえ、石さえずまく切つてあれば、建物は固着材はなくても、石の重みでしっかりしているとして、各ファランクスがしっかりしておれば、政治は無用であるという、無政府主義的な考えを示唆した。

アメリカでフリーエの思想を普及したのは、アルバート・プリス

これらのうち最も有名なものは、テネシーのナショーバ(Nashoba)に建設されたフランシス・ライト(Francis Wright)のロニーであった。それは白人の共産主義グループに黒人を働かせることによつて、黒人を徐々に解放しようとする意図をもったものであった。イギリスではオーウェンの支持者たちが、二つの大きな共同体をつくった。一つは一八二六年にスコットランドのオーピストン(Oppiston)に、いま一つは一八三九年にハンプシャイアのクイーンウッド(Queenwood)に建設された。しかしこの二つとも短命であった。

以上はすべてオーウェン主義に立脚した共同体であったが、一方、このようなオーウェン主義の実験に対する反動として、いくつかの「無政府主義的」な共同体が建設された。これはニュー・ハーモニーから失望して帰った無政府主義者ヨシユア・ウォーレン(Josiah Warren)によつてつくられたもので、一八三〇年に建設されたオハイオのエキティ(Equity)、一八四七年に建設されたオハイオのユートピア(Utopia)、一八五一年に建設されたロング・アイランドのモダン・タイムス(Modern Times)の三つの共同体がそうである。

＜B＞フリーエスト(Fouriest)

フリーエもオーウェンと同じく、国家を小さい共同体に再組織すべきことを主張した。かれはこの共同体をファランクス(Phalanx)と名づけた。ファランクスは三百の家族から成り、共同の経済活動を行なう自治体のことである。フリーエは、共産主義は結局において個人の創意を無視するものであるゆえに不完全であるとし、個人

ペイン(Albert Brisbane)、ホレス・グリーレイ(Horace

Greley)、ジェージ・リフレイ(George Repley)の三人で、一八四〇年代以来、アメリカに三三のファランクスが、中部および中部大西洋岸の地域一帯につくられた。これらの共同体はだいたい、百名ないし二百名のメンバーから成り、フリーエの原則通りではなかったが、株式組織、職業の自由、利益配分の諸原則、およびファランステールの建設などが一般に実施された。これらのうち比較的に長く続いたのは、ニュージャージーの北米ファランクス(North American Phalanx)とウイスコンシン・ファランクス(Wisconsin Phalanx)であった。前者は一二年間、後者は六年間続いた。

一八四一年に建設されたブルック・ファーム(Brook Farm)も、やはりフリーエ主義に立脚して建設されたものである。これはボストン近郊の美しい丘陵や森のある場所につくられ、作家のホーソンをはじめアメリカの有名文化人が多数参加したことでも有名である。この共同体は経済状態はよくなかったが、メンバーはその快適な共同生活と労働生活に満足していた。しかし彼らが二二年にわたって建設し、ひじょうな期待をよせていたファランステールの建物が火災にかかり全焼したが、この共同体の命取りとなった。ブルック・ファームは結局、六年間続いて解散した。

＜C＞イカリアン(Icarians)

エティエンヌ・カペーは一九世紀の前半に活躍したフランスの社会主義者である。彼も当時の多くの社会主義者と同じく、暴力による社会革命に反対した。カペーは暴力革命は、結局、あまりにも多い偶然との戦いで、成功の確実性、可能性は殆どないものと考えた。

そして彼は未来の共産主義の実現は、理性の力のみによるものであり、それは初期のキリスト教徒のような忍耐と犠牲心にもとづく平和な宣伝と説得の手段によつてのみ、達成できるものであると強調した。このようなカベールは共産主義実現のための暴力を否定したが、一方において、共産主義は全体社会の規模においてのみ真に実現可能なもので、オーウェンやフーリエの主張するような小規模な共同体での実現は、結局は効果のないものであると考えていた。

カベールはバリで社会改革の活動のために活躍したが、その反政府的な言辭と論文のために反逆罪に問われ、逮捕を免がれるために、一八三四年にイギリスに渡った。イギリスで彼はロバート・オーウェンと近ずきになったが、彼の影響で、ニュー・ハーモニーのような共産主義的共同体を建設しようという考えを、心に懐くにいたった。一八三九年にカベールはフランスへ帰ると、有名な『イカリール旅行記』(Voyage en Icarie)を書いた。この著書による彼の共産主義の宣伝は大きな成功を博し、カベールは多くの信奉者を得たので、一八四七年、彼は共産主義社会イカリールをアメリカの地に実施することを宣言した。

カベールはテキサスのレッド・リバーの岸に土地を借り、イカリールの先遣隊が一八四八年に乗りこんだ。しかし土地プロローカーの詐欺にあつて、この土地は駄目になった。カベールとその追隨者たちはイリノイのノーヴー(Novoo)に土地と建物を借りた。それはモルモン教徒が放棄した場所であつた。彼らはこの地に共産主義の共同体を建設した。ノーヴー共同体では、カベールが毎年その長に再選されたが、カベールの専制的なやり方に不満が生じ、一八五六年ついに分裂するにいたつた。カベールを含めて約一八〇人の人たちがセント

文で、近代までのユートピアン共同体はすべて宗教的なものであるといつたが、この一八世紀以前の歴史時代にも、世俗的共同体があつたかもしれない。さらに私が扱つたユートピアの実験は、地域的には、一つの例外すなわちパラグワイのジェスイットを除いて、すべてヨーロッパおよび北米大陸のものに限られ、また時代的には、一九世紀までのものに限られている。それに私はユートピアをエンロピー零にあるものと規定するが、もしレヴィ・ストロースのいうことが正しいならば、われわれはユートピアン共同体を、文明社会よりはむしろ未開社会の中にこそ求めるべきかもしれない。

このようなわけで、ユートピアの実験の事実を取扱つた本論文の後半は、不完全なものといわねばならない。しかしそうはいうものの、少なくとも文明社会の一部における、現在、入手しうるユートピアの実験の資料に関する限り、その大凡の傾向は把握した積りである。われわれにとつて、ユートピアン共同体が前世紀に花々しくかつおびただしく登場したことは、まことに一つの驚異である。しかしまた、その大半が短命で、歴史という流れに浮びかつ消える泡沫のような果敢ない存在であつたことは、われわれにとすれば、一種の絶望感をいだかせるものである。実際、当時の共同体でいまなお存続しているのは、ハテライト、アマナイト、アミッシュなどの宗派に属する数十のコミュニティだけである。しかもこれらの生き残つた共同体のすべてが、近世ヨーロッパに起つた既成教会への造反運動に、その起源を有しており、それ自体、数百年の歴史と伝統をもっているということは、興味ある事実である。

しかしわれわれが一九世紀の実験から、ユートピアン共同体そのものに対して絶望感をいだくのは、あまりにも単純かつ早計ではな

ルイスへ去り、カベールはセントルイスでその年に死んだ。ノーヴーの人たちは一八六〇年にアイオワのコーニング(Corning)に移つた。コーニングの共同体は経済的に成功したが、一八七七年に私有財産を認めるか否かで意見の不一致が生じ、共同体は二つに分裂した。一八八三年には私有財産を認めないメンバーたちが、カリフォルニアのクローバーデール(Cloverdale)に移り、そこに共同体を建設した。これはイカリール・スペランサ(Icaria Speranza)と呼ばれた。このように分裂したイカリールのコロニーは二つとも経済的に成功したが、しだいに私有財産を認め、雇用労働や賃金労働を許すようになって、本来の共産主義は崩壊し、一八九五年、彼らはついにイカリール共同体の解散を声明した。かくしてこの運動の最後のあとかたも永久になくなってしまった。

イカリール共同体はフランス人を主たるメンバーとするもので、それは世俗的ユートピアン共同体として最も長く続いたものであつた。しかしイカリール共同体の半世紀にわたる経験は、困苦と内紛と移住の歴史でもあつた。

結語

以上、私はユートピアン共同体が、人類の歴史の中でどのように具体的に現われてきたかを記述してきた。私がここに述べてきたユートピアン共同体の数は、勿論これだけではない。それが記録されなかつたために、あるいはかつて記録されたかもしれないが、発見されないままに、永久にわれわれの記憶からほうむり去られたユートピアの実験も、おそらく数多く存したであらう。私はまたこの論

いだろうか？ 二〇世紀に入ってから、すでに少なからざる社会科学者たちは、ユートピアの志向が今日の問題であることに、気づいてきている。ある学者は二〇世紀が一九世紀と違って、ユートピアン共同体を実現するのに、はるかに豊かな土壌であることを指摘している。おそらく一九世紀のユートピアの実験は、ラマルティエヌの言葉を借りるならば、「早熟の真理」であつたということができであらう。

二〇世紀の文明人は、いままで人間が追求してきた「よりよき生活」なるものが、実はそれ自体、矛盾したものであり、また所詮は権力と結びついたまやかしのものであることに、ようやく気づきはじめた。そしてもしこの追求の方向がそのまま続くならば、それは人間の非人間化をますます助長し、ついには人間の生命すら脅かすことによって、人類の滅亡をさへもたらすのではないかという、漠然たる不安が次第に瀰漫してきている。人間が人間であることに對する不安、これはいままで一部の感覚の鋭敏な人間のみがもつてきた不安である。しかしいまやこの不安は、少なくともその源を作り出してきた文明人一般の不安になりつつある。それは人間存在の根源的なものに対する不安であり、またすべての人間が共有する不安であるという二つの意味において、絶対的の不安である。この絶対的の不安こそ、人間を絶対的ユートピアへと指向させるものではないだろうか？

(一九七〇・一〇・二八)